



集英社版 世界の文学

7

セリーヌ

なしくずしの死

滝田文彦 訳

集英社

集英社版世界の文学7

セリーヌ

一九七八年一〇月二〇日印刷

一九七八年十一月二〇日発行

訳者 滝田文彦

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一六一五

電話(〇三)二三九一三八二

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇二 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

電話 出版部(〇三)二三〇一六三六一

販売部(〇三)二三八一七七八一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社

目次

なしくずしの死

解説

著作年表

滝田文彦訳

滝田文彦

3

564 557



なしくずしの死

リュシアン・デカーヴに

服を着なよ！　まずズボン！  
短すぎることもありやあ、長すぎることもある。

おつぎがずんどうの上着！

チョッキに、シャツに、重たいベレー

こいつが海の上だったら

世界一周でもできそうな靴だ！……

「牢獄の歌」

こうしてわれわれはまたも孤独だ。すべてはこんなにも遅く、重く、もの悲しい……もうじぎわたしは年をとるだろう。そしてついにはこれも終りになるだろう。わたしの部屋にはおおぜいの連中がやって来た。やつらはいろいろなことを言った。たいしたことじゃなかったが。そして出ていった。やつらはめいめい世界の片隅で年をとり、惨めで、のろくなつた。

昨日、八時に、門番のベランジュ婆さんが死んだ。夜のあいだに大嵐おほなみが起る。われわれの住んでゐるつべんの方じゃ、家は震える。彼女はやさしくて、親切で、信頼がける友だつた。明日、ソール街で埋葬がある。本物の年寄りで、まったくよぼよぼの婆さんだつた。咳せきをはじめた最初の日、「とにかく横になつちゃだめだ！……寝床で坐つてるようにしなさい！」と、言つてやつたものだ。あぶないとは思つた。たら、とうとう……でもまあ、仕方がない……

医者というこの糞くそおもしろくもない商売を、わたしはずつとやっていたわけじゃない。ベランジュ婆さんは死んだと、わたしを知つていた連中、婆さんを知つていた連中に

手紙を出すつもりだ。やつらは今どこにいる？……わたしは嵐がもつともっと荒れまくり、家々の屋根が崩れ、春がもう帰つてこず、この家が消え失せればいいと思ふ。

ベランジュ婆さんは知つていた、悲しいことはみんな手紙でやつて来るのを。わたしはもう誰に手紙を書いていいかわからない。連中はみんな遠くに……やつらの魂は變つた、裏切り方、忘れ方がうまくなり、いつもほかのことをしゃべつていられるように……

年とつたベランジュ婆さん、誰かが来てやぶにらみの彼女の犬を引き取り、連れていつてしまふだろう……

手紙の中の悲しいことは、もう二十年近く、みんな彼女もなく酸っぱい味にまじつてまだそこにある……悲しみが孵化ふかしたのだ……そこにある……さまよつて………そいつはわれわれを知り、われわれは今じゃあそいつを知つてゐる。それはもう永久に立ち去らないだろう。門番室の火を消さねば。誰に手紙を書く？もう誰もいない。死者たちのやさしい精神を静かに迎え……そのあとでもつと静かに事物に語りかけるための人間は……元気を出せ、もうひとりぼっちなんだ！

臨終まぎわには、門番の婆さんもうなにも言えなかつた。息がつまり、わたしの手をにぎつて引きとめていた……郵便配達がいつてきた。彼は婆さんが死ぬところ

を見た。ちょっとしたしゃっくり。それでしまいだった。昔は、おおぜいの連中がわたしを訪ねて、彼女のところへやって来た。彼らはみんな遠く、はるか遠く忘却の中に、魂を求めて行ってしまった。郵便配達は制帽を脱いだ。わたしは憎悪をぶちまけてやることもできるだろう。わかっている。もっと後で、もしやつらが帰ってこなかったらそうしよう。それより話をするほうがいい。やつらがわたしを殺しに世界の隅々から、わざわざもどってこざるをえないような話をしてやろう。そうすればこいつにも片がつき、満足が得られるというものだ。

\*

わたしの働いているヘリニューター財団の病院では、すでにわたしの話にたいして、さんざん不愉快な意見が述べられていた…… 従兄弟のギュスタン・サバヨはその点に関しては何じつにはっきりしている。ちがった種類の話をしろというのだ。彼もまた医者だが、セーヌ河の向うのシャベル・ジョックションでやっている。昨日、わたしは彼に会いに行く暇がなかった。ちょうどペランジュ婆さんの話をしようと思っていたのに。出るのが遅くなりすぎた。われわれの仕事、診察するのは辛い仕事だ。ギュスタンもまた、晩にはくたくたになっている。たいていの人間はすぐく疲れ、質問を浴びせてくる。急いだってなんにもならない、処方について二十遍も繰り返して、細かく教えてやら

なくちゃならない。やつらは人にしゃべらせ、くたびれさせて喜んでるんだ…… 立派な注意をしてやったってまったく無駄だ。そのくせ彼らは医者が苦勞してないんじゃないかと心配して、もっと確かめようとしてしつこくきく。やれ吸い玉だ、レントゲンだ、血液検査だ……と、身体の上から下までいじくり回してほしがる…… なんでも測ってもらいたがる…… 血圧だ、その他なんだかんだくだらないものを…… ギュスタンは、ジョックションでもう三十年も医者をやっている。ある朝、この乞食みたいな患者どもをヴィレットの屠殺場に送って、温かい血を飲ませてやりたいものだ。そうすりゃ、やつらもその日は明け方からくたくたってことになるだろう。それ以外、やつらをげんなりさせる方法をちょっと思いつかない……

とうとう一昨日、わたしはギュスタンのやつを家に訪ねる決意をした。彼の住んでいる土地は、いったんセーヌ河を渡れば、わたしのところから二十分の場所だ。天気はあまりよくなかった。でも、わたしは飛び出した。バスに乗ろうかなと考える。診察を終えようとして急ぐ。救急病棟の廊下を通って抜け出す。と、一人の女がわたしを見つけて、引き留める。女はわたしとおんなじで、まのびした話し方をする。疲労のせいだ。おまけにせいぜい声なのは、アルコールのせいだ。彼女は泣きまねをはじめて、わたしを引っ張っていかうとする。「先生、お願いです。来てください！……小さな娘のアリスが……」ランシエンヌ街

です！……すぐそこですか！……」どうしても行かなくちゃならないことはない。原則としては、わたしの診療時間は終わったのだ！……彼女はしつこく頼む…… われわれは外に出た…… もう病人はうんざりだ…… 午後以来、三十人もうるさい連中を診てやっている…… もうできない…… 勝手に咳をしろ！ 唾を吐け！ 骨が抜ける！ おたがいにオカマでも掘れ！ 尻に三万種類のカスがつまって飛んでいけ！…… 糞食らえだ！…… だが、泣き女はわたしをつかまえて、がっしり首にぶら下がり、顔に絶望の吐息を吐きかける。それにはたっぷり「赤葡萄酒」が混じっている…… どうてい逆らえない。この女は絶対離してくれないだろう。カース街まで行ったら、あの通りは長いし、全然明りがないから、たぶん尻を思い切り蹴飛ばしてやろう…… だが、わたしはまたしても勇気がない…… へなへなとなっチャウ…… でまた、おなじ文句の繰り返した。「小さな娘が！…… お願いです、先生！…… 小さなアリスが！…… ご存知でしょう、あの子を？……」ランシエンヌ街はそんなに近くはない…… 回り道になる…… わたしはその通りを知っている。ヘケール工場」の先だ…… わたしは朦朧としながら彼女の声をきく…… 「週給たった八十二フランなんですよ…… 二人も子供がいて！…… それに夫ったら、わたしをひどい目に会わすんです！…… ほんと恥しくなりますわ、先生！……」

そんなのはみんなでたためなのを、わたしはよく知っている。そいつは葡萄の実の腐ったのと、粘液から発散する臭い匂いがする……

われわれは彼女の家の前に着いた……

わたしは上る。そしてやっと坐る…… 女の子は眼鏡をかけている。

わたしはその子のベッドのわきに坐る。ともかくも、子供はまだちょっとばかり人形で遊んでいる。で、わたしのほうでもその子をおもしろがらせにかかると、わたしはやろうと思えばすこく滑稽になれる…… 子供は助からないわけじゃない…… いくぶん呼吸が困難なだけだ…… 充血を起しているのちがいない…… わたしは女の子を笑わせる。子供は息をつまらせる。わたしは母親を安心させると、やくざ女め、わたしを家に引きずり込んだのを幸い、今度は自分が診てもらおうというのだ。というの、腿一面にぶんなぐられた跡ができているからだ。女はスカートをまくり上げる、と大きな斑と、深い火傷さえてきている火かき棒でやられたんだ。失業している彼女の夫というのはそういう男だ。で、わたしは手当の仕方を教えてやる…… それから汚い人形のために、紐ですごくおもしろい小さなブランコをこさえてやる…… そいつはドアの取手のところ上であったり下がったりする…… そのほうがしゃべってるよりましだ。

聴診すると、と、たっぷりラッセル音がきこえる。だが

けつきよくのところ、そんなに重体ではない……もう一度安心するように言う。二度おなじことを繰り返す。くたくたに疲れるのはそれだ…… 女の子はもう笑っている…… と、また息がつまりだす。話をやめなくちゃならない。女の子はチアノーゼを起す…… たぶん軽いジフテリアにかかっているんだらうか？ よく診てみなくちゃ…… 標本を取るか？…… 明日だ！……

父親が帰ってくる。八十二フランじゃ家では林檎酒しか飲めない、葡萄酒はもう全然だ。「わたししゃどんぶりで飲むですよ。しょんべんがしたくなりますがね」と、彼ののっけから言う。そして壘からラップ飲みする。わたしにやってみせようというわけで…… われわれは女の子の容態がそんなに悪くないのを喜び合う。わたしはもっぱら人形が夢中になっている…… 大人どもや、予後のことにかかずらうにはあまりにも疲れている。大人ってやつはまったくの糞だ！ 明日まではもう一人も診てやるもんか。

連中にふまじめだと思われようとかまやしない。わたしは健康を祝してもう一杯飲む。わたしが来てやったのは無報酬で、完全に余分なことだ。母親はまた腿のことを持ちだす。わたしはもう一度最後の注意をあたえる。そして階段を降りる。歩道に出ると、子犬がびっこを引いている。犬は有無を言わずわたしについてくる。今晚は、なにかもがうるさくまとわりつく。犬は、黒と白の小さなフォックステリアだ。どうやら野良犬らしい。階上の失業者の

夫婦は恩知らずだ。見送りもしない。またなぐり合いをはじめたにきまつてる。大声でわめいているのがきこえる。どうぞ薪の燃えさしをたっぶり女のけつの穴に突っ込んでやってくれ！ したらあのけがらわしい女も性根が直るだらう！ 人に迷惑をかけるかどうかということになるか覚えるってものだ！

そこで、わたしは左手の方へ向かう…… つまりコロンプ（北郊）の方だ。子犬はあいかわらず後についてくる…… アスニエールをすぎるとジョンクシオンで、その先がわたしの従兄弟のところだ。だが、子犬はひどくびっこを引く。じっと人の顔を見つめる。そんなふうにくすぐずしているのはとうてい見ちゃいけない。けつきよく帰ったほうがよさそうだ。われわれはビヌー橋を渡ってもどり、それから工場の列のわきをすぎる。帰ってみると、無料診療所はまだ完全にはしまっていないかった…… わたしはオルタンズ夫人に言った。「子犬に飯を食わしてやるぜ。誰か肉をめつけてきてくれよ…… 明日の朝早く、電話しよう…… したら《動物愛護協会》から車で引き取りにくるだらう。今晚は閉じこめておいたほうがいいな」で、わたしは安心してまた出かけた。だが、その犬はすごく臆病だった。きつとひどくひっぱたかれていたのだ。往來ではひどい目に会うことがある。翌日、窓をあけると、犬は待とうとせぜ外に飛び出した、われわれのことも恐がっていたのだ。閉じ込められたのは罰だと思ったのだ。なに

もわかつちやいなかつた。もうなんにも信じなくなつてい  
た。こうなるとしまつが悪い。

\*

ギュスタンはわたしのことをよく知っている。酒を飲ん  
でいないときには、じつにいいことを言ってくれる。すて  
きな文章のことにかけちや専門家だ。彼の意見は信頼でき  
る。これっばかしも嫉妬あやうなんてものはない。もはや世の中  
にたいしたもの求めちやいない。彼には恋の古傷がある。  
それを自分で手離したくない。めつたにその話はしない。  
相手というのは自堕落な女だつた。ギュスタンは高貴な心  
の持主だ。彼は死ぬまで変るまい。

そのあいだにも、彼はすこしばかり酒を飲む……

わたしの悩みは睡眠だ。もしいつもよく眠れたら、一行  
だつて書きはしなかつたらう……

「きみもなにか楽しい話を書けばいいんだ……たまにはな  
……」それがギュスタンの意見だつた、「人生つてのはそ  
んなに汚いことばっかしじゃないさ……」ある意味ではそ  
れはかなり正しい。わたしの場合には、一種の偏執、偏見  
がある。それが証拠に、両方の耳が今よりもずっと耳鳴り  
がし、四六時中熱があつたころも、わたしはこれほど憂鬱あふり  
ではなかつた…… わたしは密かに美しい夢を売つていた  
…… わたしの秘書のウィトリューヴ夫人も、おなじこと  
を言つていた。彼女はわたしの苦悩をよく知つていた。人

は気前がいいと宝物を散らかし、見失う…… だから、わ  
たしは自分に言つた、《ウィトリューヴのやくざ婆あめ、  
宝をどっかへ隠しやがつたな……》あれは本物の奇跡なん  
だ……《伝説》のかけら……純粋な恍惚…… 今後は、あ  
の方面のことを猛然と書いてやろう…… もう一度よく確  
かめるため、わたしは紙の奥を引っかき回す…… な  
にも見つからない…… わたしの出版エージェントのドリ  
ユメルに電話する。彼がわたしのことを死ぬほど嫌はばい  
いと思ふ…… さんざん悪態をついてぶうぶう言わしてや  
ろう…… 彼を頭に來させるにはそのくらいしなくちゃだ  
めだ！…… ところが彼は平ちゃらだ！ 彼は何百万も金  
を持つている。わたしに休暇でも取つたらと答える……  
とうとうウィトリューヴがやつて来る。わたしは彼女を信  
用していない。それには立派なわけがある。おれの傑作を  
どこにやつたんだ？ と、いきなり浴びせかける。彼女を  
疑う理由がすくなくとも何百かはあつた……

リニユティー財団はポルト・ペレルの青銅の気球の前  
にあつた。ウィトリューヴはほとんど毎日、わたしが患者  
の診察を終えた後、そこへわたしの原稿の清書をとどけに  
來た。臨時の小さな建物で、その後取り払われた。わたし  
はそこが好きじゃなかつた。時間が規則的すぎた。創立者  
のリニユティーというのは百万長者の大金持で、すべての  
人が金がなくても治療を受けられ、具合がよくなることを  
望んでいた。博愛主義者なんてやつはうんざりだ。わたし

としては、むしろちょっとした市の仕事のほうがましだったろう…… 内々やる予防接種…… 健康診断書での小遣稼ぎ…… 公衆浴場の監督でも…… 要するに一種の隠居仕事だ。アーメン。だがわたしはヘンダヤ野郎でも、毛唐でも、フリーメーション会員でも、高等師範学校出身でもないし、自分を偉そうに見せることも知らないし、女と寝ずぎるので、評判が悪い…… 十五年来、やつらは〈環状地帯〉でわたしを眺めてきた、最底にくだらないうすみたいな連中は、わたしが悪戦苦闘するのを眺め、わたしになれなれしくし、あらゆる侮蔑の態度を取っている。鹹にならなただけかもしれませんが。文学がその埋合わせをしてくれる。まあそんなに悪い暮しでもない。ヴィトリューヴ婆さんがわたしの小説をタイプに打ってくれる。彼女はわたしから離れられない。「おい！ おおっかさんよ」と、わたしは言ってる、「おれがあんたにがみがみ言うのもこれが最後だぜ！…… もしおれの〈伝説〉が見つからなかったら、終りだと思っくいぜ、おれたちの仲もしまいだぜ。もう信頼した協力も！…… 古くなったパンも！…… 酒も！…… なにもかもだ！……」

と、彼女はわっと泣き言を言います。ヴィトリューヴは顔といい仕事といい、なにもかもすさまじい。わたしにとつちやどうしようもない義務みたいなもんだ。イギリス以来わたしは彼女を引きずっている。ある誓いの結果そうなった。昨日や今日の知り合いじゃない。彼女の娘のアンジ

ェールが、ロンドンで、昔わたしに生涯彼女の面倒をみると誓わせたんだ。わたしは立派にそうしてきたと言える。わたしは約束を守った。アンジェールにたいする誓いだ。そいつは戦争中の話だ。それにまあなんと誓ったって、彼女はいろんなことをよく知ってるし。いいじゃないか。彼女は原則的にはおしゃべりじゃない、ただよく覚えている…… 娘のアンジェールは個性的な娘だった。その母親がこんなに下等になれるってのは驚きだ。アンジェールは悲劇的な最後をとげた。どうしてもと言われれば、いつかそのことを語ろう。アンジェールにはソフィーという背の高い薄馬鹿の姉妹がいて、ロンドンに住みついた。それからこっちにミレイユという年下の姪がいるが、こいつは一族の欠点の塊みたいなもんで、まったくひどい女で、一族の綜合だ。

わたしがランシーから引越して、ポルト・ペレールへ来ると、ヴィトリューヴとミレイユは二人ともくっついてきた。ランシーは変わった。城壁も〈稜堡〉も、ほとんどなものこつていない。ひびのはいった巨大な黒い残骸を、やわらかい盛り土から歯根のように引き抜いている。すべてが滅びる、都市は古い歯茎をむさぼり食う。今では〈P・Q副〉のバスが、廃墟の中を竜巻のように突っ走っている。ほどなくいたるところ、黄色の半摩天楼ばかりになるだろう。まあ、見物だ。貧乏の話になると、いつでもヴィトリューヴと言い争いになった。彼女はいつも自分のほうが苦

勞してきたと言ひ張った。そんな馬鹿なことはない。そりゃたしかに皺しわということになれば、彼女のほうがわたしよりずっと多い！ 皺しわつてものはきりが無い、青春の歲月が肉に刻んだこの不潔な切妻壁は。「きつとミレイユが原稿をどっかに片づけたんではしょ！」

わたしは彼女といっしょに出かけ、ミニム河岸まで送って行く。彼女らはビトロネル・チヨコレート工場のそばにいっしょに住んでいて、そいつは「メリディアン館」という名だ。

二人の部屋は途方もなく乱雑で、がらくたの商品、特に下着類の山であり、いずれも壊れやすい、ひどい安物ばかりだった。

ウイトリユー夫人と姪は、二人とも淫乱女だ。用具一式とゴム製の洗浄器ソープのほかに、注入器を三本持っている。そいつをみんな二つのベッドのあいだに置いてある、それからまた大きな噴霧器があるが、二人はまだ一度も巧くそれを噴射させたためしがない。わたしはウイトリユーのことをあんまり悪く言いたくない。彼女はたぶんわたしより人生でもっといやな目に会ったのだろう。そう考えるといつも怒りがおさまってくる。さもなければ、確実にそうと知ったら、思ひっきりぶんなぐってやるのだが。彼女は暖炉の奥に「レミントン」のタイプライターを入れていた。その支払はまだすんでいない……と、称するのだが。わたしはタイプでの清書にそんなに金は払っていない、それ

はまあたしかなだが……一ペーシ六十五サンチム、それだつてしまいは大した額になる……とりわけ部厚い本が何冊かともなれば。

やぶにらみという点にかけちゃあ、ウイトリユーほどひどい女は見たことがない。とうてい正視に耐えないほどだ。

トランプ、といつてもタロット・カードをやるときには、この恐ろしいやぶにらみのせいで箔はくがついて見えた。彼女は貧しい女たちを相手に絹のストッキングを売っていた……そしてまた未来の運勢を、払いは付けで。占いで迷ったり、考え込んだりするとき、眼鏡の背後で、ほんものの伊勢海老えびのように眼玉を動かした。

特に「カード占い」をやらうになつてから、彼女は近所で威信を高めていた。彼女は女房を寝取られた男をみんな知っていた。その連中を窓からわたしに教えた、それからまた三人の殺人者さえ、「ちゃんと証拠があるんですよ！」その上、わたしは血圧を計れるよう古いロープリー血圧計をくれてやったし、静脈瘤じゆうみくのための簡単なマッサージュを教えてやった。その結果、彼女の臨時収入は増した。彼女の野望は墮胎うたわいをすること、または血なまぐさい革命に加わって、いたるところで噂うわさされ、新聞にまで書き立てら

\* 元来はチニールによって造られたバリ周壁と、郊外とのあいだの軍事地帯として、建築禁止の地帯。一九一四年、周壁の取り壊し後、その跡に生れた環状の新聞地を指すようになる。

れるようになることだった。

わたしは彼女が乱雑な部屋の隅を引っかき回しているのを見ると、とうてい書きあらわせないくらいいやな気がした。世界中には、毎分のように感じのいい人間を轢き殺しているトラックがあるものだ…… ヴィトリューヴ婆さんはつんとするような臭いを発散させた。赤毛の女はとかくそうだ。赤毛の女ってやつは動物的な運命じゃないかと思う、野蠻で、悲劇的で、そういうのが毛肌に浸みついていて。わたしは彼女が大声で思ひ出話をしゃべっているのを聞くと、ぶっ殺してやりたい気持ちになった…… 彼女はいつも尻がむずむずしていたが、充分色恋の相手を見つけないのはむずかしかつた。酔っぱらいの男じゃなくちゃ。それも暗闇じゃなくちゃだめだ！ その点に閃いては、わたしは彼女を気の毒に思ってた。色事を上手にやることにかげちゃ、わたしのほうが上手だった。彼女はそれも不当なことだと思っていた。そうしなくちゃならない日が来たら、死を購うだけのものをほほ充分に、わたしは自分のうちに持っていた！…… わたしはへ美しいものゝ年金生活者だった。尻、それもすてきな尻をたつぶり食ってきた…… そのことをはっきり告白しておかなくちゃならない。わたしは無限を食っていたのだ。

彼女は貯金がなかった、それは誰にでもわかることだし、言うまでもない。食べ、そして少しは楽しみもするためには、彼女は客がくたびれているとき、あるいはその不意を

襲ったりして、とっつかまえる必要があった。そいつは地獄だった。

しがたない労働者たちは、たいていは七時すぎには家に帰っている。女房たちは皿を洗い、男たちはラジオの電波にくるまっている。その時刻になると、ヴィトリューヴはわたしのすばらしい小説を捨てて、飯の種を漁りに出かけるのだ。踊り場から踊り場へと、いくぶん痛んだ靴下や、安物のジャージーのセーターを持って商いに歩く。恐慌前には、まだ掛売りや、客を面食らわせる遣り方でなんとか巧くやっていった、だが、今ではそれとまったくおなじ商品を、大道の札当でゲームで負けて怒った人間に景品としてくれる。もはやこれじゃあ、まともに太刀打ちはできない。わたしは彼女に、すべてはチビの日本人どものせいだということをわからせようとした…… 彼女は信じなかった。わたしはわたしのすてきな伝説をわざと自分の汚物といっしょに溶かしちゃったんだと言って、彼女を非難した……

「あれは傑作なんだぞ！」と、つけ加えた。「絶対見つけなくちゃ……！」

彼女はげらげら笑った…… 二人でいっしょに安物の商品の山を引っかき回した。

すごく遅れて、とうとう姪が帰って来た。やれやれ、なんて腰だ！ 彼女の尻ときたら本物のスキヤンダルだ…… スカートにいっぱい褌がある…… だからよけいはつきり

それが目立つ。割れ目のあるアコーデオンだ。なにもかもくつきり見える。失業者つてやつはやくそで、セックスに飢えていて、女を誘う金がない…… だからわいわい言う。「よお、いい尻だな！」と、連中はミレイユに言葉をかける…… 面と向かつて。廊下の端で、いつもむなしく勃起して。他の連中より顔がいい若者は分け前にあずかれるようにできていて、人生を甘く考えている。彼女が必死になるようになったのは、もっとずっと後のことだ！…… さんさん不幸な目に会ったあとで…… 目下のところは彼女は楽しんでた……

彼女にも、わたしのすてきな〈伝説〉は見つからなかった。彼女は〈クロゴルド王〉のことなんぞどうでもよかつた…… わたしが一人で気をもんでいた。彼女が人生を学んだのは、〈鉄道〉の少し手前にある〈プチ・パニエ〉、ポルト・ブランシオンのダンスホールでだった。

二人は、わたしが怒っているあいだ眼で追っていた。彼女らの考えによれば、わたしは最高に〈くだらないやつ〉だった！ せんずり掻きで、臆病で、インテリで、その他等々というわけだ。だが今では、驚いたことには、彼女らはわたしがいなくなるのを恐れていた。もしわたしが逃げ出したら、彼女らはどうしたことだろう？ まちがいなく、叔母のほうは何度もそのことを考えたにちがいない。わたしがちょっとばかり旅行のことを口にしたとたん、彼女らはぞくぞくつとするような微笑を投げてよこした……

ミレイユは尻がすばらしいばかりでなく、眼がロマンチックで、うっとりするような眼差しをしていたが、鼻が頑丈で、この鼻つてやつが、彼女の苦の種だった。ちよつとばかりいじめてやろうと思うときには、こう言つてやつた、「ふざけるなよ！ ミレイユ！ おまえの鼻は男みたいじゃないか！……」それにまた彼女はほら話をするのが上手で、水夫みたいにそれが好きだった。あらゆることを創作した、最初はわたしを喜ばせるために、後にはわたしを傷つけるために。わたしにはおもしろい話をきくのが好きだという弱点がある。彼女はそれに付け込んだだけのことだ。おたがいの関係を断つため、とうとう暴力沙汰にまでおよんだが、たとえわたしが彼女を殺したとしても、そんな騒ぎになったのは千倍も彼女のほうが悪いからだ。しまいに彼女は彼女もそのことを認めた。まったくの話、わたしは寛大だった…… 正当な理由があつて罰したのだ…… みんながそう言つた…… 事情を知っている連中は……

\*

繰り返して言うが、ギュスタン・サバヨは診断のことで頭を悩ますようなことはなかつたと言つたところで、彼の名誉にはなるまい。彼は雲を見て情勢を判断するのだ。家から外に出ると、まず最初に空を見上げる、「フェルディナン」と彼は言つた、「今日はまちがいなくリューマチ患者がおおぜいくるぞ！ 五フラン賭けてもいい！

……」空でそいつを読みとるのだ。彼は気温や、いろいろな体質のことをじつによく知っているので、決して大きくはずれることはなかった。

「それすら！ ずっと涼しかったあとで土用の猛暑ってわけだ！ いいか！ まちがいなしに甘汞(下剤)がいてるぜ！ 空気の底に黄疸がいてる！ 風が変った…… 〈北〉から〈西〉へ！ 〈寒気〉から〈驟雨〉へ！…… 二週間は

気管支カタルだな！ 連中が服を脱ぐまでもないさ！…… おれが指図してるんだったら、ベッドにもぐりこんだままで処方を書いてやるよ！…… とにかくフェルディナン、連中ときたら、来たとたんにしやべりまくるんだから！

…… 開業してるやつらなら、まだ話がわかるが……だが、おれたちは？…… 〈月給〉だろ？…… それがなんの役に立つ？…… おれなら乞食野郎どもを見なくたって治療してやれるぜ！ ここから一歩も動かすにな！ だからってやつらは少なくとも多くも窒息はしないだろうさ！ よぶんに吐くってこともなけりゃあ、黄色さや、赤さや、蒼さや、馬鹿さかげんが減るものでもなし…… それが人生つてものだ！……」正しいと言やあ、ギュスタンの言うことはまったく正しかった。

「きみはやつらがほんとに病氣だと思うか？…… うめいたり…… げつぶをしたり…… よろめいたり…… 膿疱(のうほう)ができたり…… きみは待合室を空っぽにしたいかね？ あつという間に？ 唾を飲み込むと息がつまるような連中も？

…… やつらをちよいと映画に誘ってみろよ！…… 向かいの店でただで食前酒を飲ましてやれよ！…… たらわかるさ、どれだけのやつがのこっているか…… やつらが来てるさく付きまとうのは、まず第一に退屈してるからだ。

祭日の前日には一人も来やしないだろ…… いいかね、よく覚えとけよ、ああいったあわれな連中に欠けているのはやることで、健康じゃないのさ…… やつらが求めているのは、きみに気晴らしをしてもらい、楽しませてもらい、おもしろがらせてもらうことさ、やつらのげつぶや…… 屁や…… ガタバシで…… きみに説明をつけて欲しいのさ…… 熱だの…… ごぼごぼだの…… 新発見の病氣だの！……

きみがよく理解して…… 一生懸命になって欲しいのさ…… そのためにきみの医師の免許はあるんだからな…… ああ！ 死をこさえながら死を楽しんでる、それが〈人間〉でもんだ、フェルディナン！ やつらは淋病だの、梅毒だの、肺病だのがなきや困るのさ。そいつがいてるんだ！ 汁の出ている膀胱だの、熱くなっている直腸だなんてものはどうだつていいんだ！ だが、もしきみがさんざん骨を折って、やつらをうれしがらせてやりさえすりゃあ、死ぬとききみを待ってるさ、そいつがきみの報酬だ！ 最後の最後まできみにまとわりついてるさ」雨がまた電気工場の煙突のあいだに降りつけるときには、彼は告げた、「フェルディナン！ こりゃ坐骨神経痛だな！…… 今日、坐骨神経痛患者が十人も来なかつたら、免状を〈学部長〉に返し

……